

<寄稿>

国土交通省「日本未来デザインコンテスト」報告 —日本の流域を旅する—

大西 文秀*

先日、国土交通省の国土政策局が公募した「日本未来デザインコンテスト」と題する魅力的なタイトルのコンテストに応募し、一次審査を通過し、霞が関での最終の公開審査のプレゼンテーションに臨みました。

この、国土交通省国土政策局が公募した『日本未来デザインコンテスト～「対流促進型国土」の形成に向けて～』は、急激な人口減少、少子化、異次元の高齢化の進展や巨大災害の切迫、インフラの老朽化など我が国を取り巻く課題を踏まえ、昨年8月の「国土形成計画（全国計画）」において、新しい国土の基本構想として提示された「対流促進型国土」の形成に向けた政策立案に資するアイデアを、様々な世代、個人・団体（5名以内）より公募するものでした。公募期間は、平成28年1月25日（月）～2月19日（金）。事務局審査を通過した、9つの提案についての、有識者3名による公開審査は、国土政策局長や大臣官房審議官も臨席され、3月25日に国土交通省合同庁舎第3号館4階 特別会議室において行われました。

私は「流域圏と環境容量の再生による国土可能性の向上」と題し提案しました。内容は、卒論から始め、この数年、流域圏学会誌に投稿させて頂き、流域圏学会出版学術賞など受賞させて頂いた試論や、これまでの4冊の著書を発展させたものでした。

公開審査にのぞむ「ベストナイン」には、流域や環境に関連した類似の提案は無く、私の名前や提案名が国土交通省の報道発表のリストの最初にあり、入賞を期待したのですが、結果は、シニアは全滅、若人に軍配が上がりました。無念にも入賞はなりませんでしたが「ベストナイン」に選出され、国土政策局長や大臣官房審議官にプレゼンでき、記念撮影や名刺交換もでき有意義な良い思い出になりました。

このコンテストには別の思い出もあります。「きっと沢山の応募があり、埋もれてしまうだろうなあ」と当初気が進みませんでしたが、「日本未来デザインコンテスト」というシンプルで魅力的なネーミングに魅かれ、締め切り間際に急遽応募しました。PDFでA4サイズ19ページ（最大20ページ）にまとめ、ファイルの開き具合など確認し、応募ホームページからWeb応募し、「応募完了メール」が届きました。何日も経ってコンテストの事も忘れ、久しぶりに鹿島槍でスキーを楽しんでいると、iPhoneに着信があり、送ったPDFファイルが開けないため、再度送ってほしいとの事でした。運よく手持ちのUSBメモリーにデータが入っており、いろいろ難儀して再送信し無事開く事ができました。「まあ、ファイルが開けても、公開審査へのお呼びはないだろう」と安心してしていると、「霞が関へお出で頂けますか？」と突然のメール。しかし最後の、「もしや、入賞かも・・・」の淡い期待は外れたデコボコ思い出です。でも、次世代を担う若者たちが入賞し、枯木も山の賑わいで、情報発信できアピールでき良かったと想っています。

この数年、「全国47都道府県レクチャー行脚」というライフワークを進めています。いつも授業の後に、「日本の環境をこんなに厳しい状況にしたのは私たち以前の世代で、若い皆さんには申し訳ない。私たちの世代は先に居なくなるけど、皆さんは後に残り、環境変動の厳しさを目の当たりにするでしょう。もう手遅れかも知れないけれど、早くこの事に気付いてもらい、生活や文化を見直す工夫をして、地球の未来可能性を高めてほしい。」とお話をしています。また、「ゆでガエル」の話もよくします。「熱い湯の入った鍋にカエルを入れると、驚いて飛び出し、カエルは助かりますが、水の入った鍋にカエルを入れ、ゆっくり茹でていくと、熱くなるのに気づかず、気づいた時には、すでに茹で上がっていて、飛び出す事も出来ず、万事休すという事をあらわしています。

* ヒト自然系 GIS ラボ 〒630-0133 奈良県生駒市あすか野南 2-6-17

この様に私たちは、今まさに“ゆでガエル状態”にあり、気づかない内に想像以上に環境悪化が進み、すでに手遅れとも言われ、次世代への問題の先送り現象が進み、近い将来、取り返しのつかない局面が発生する事につながっているのではないのでしょうか」と話しています。

コンテストの提案書の最終ページに「ゆでガエル」を載せましたのでご覧ください。

お陰様で、「日本の流域を旅する」を続けています。昨年秋から今年夏にかけ、雄物川、最上川、阿賀野川、信濃川、相模川（山中湖）、白川（熊本、阿蘇カルデラ）にお邪魔することができました。なお、相模川（山中湖）の写真は、流域圏学会の村上雅博理事のご案内。白川の写真は、2016年7月2～4日にかけて、同辻和毅理事の企画により、松下潤会長、藤村和正理事と熊本地震の現地視察勉強会に同行した時に撮影したものです。

日本には、美しい川面や景観を持つ流域がたくさんあり、街や村の立地や人々の営みも、川の流れや流域により築かれてきました。末永くその環境が保たれる事を願わずにはおれません。



雄物川（中流、秋田県）



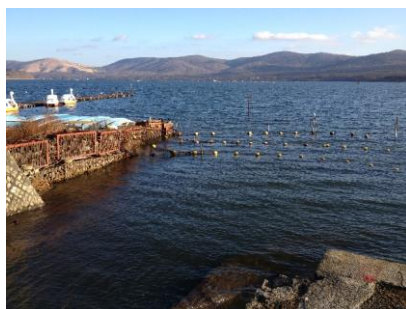
最上川（中流、山形県）



阿賀野川（中流、新潟県）



信濃川（中流、新潟県）



相模川（上流、山中湖、山梨県）



白川（上流、阿蘇カルデラ、熊本県）

■近年の私たちの対応は、根本原因の解明に基づき改善より、むしろ表面的現象や問題に対処する傾向が強く、これではいつまでも同道巡りが続くことと危惧せずにはおれません。私たちは“ゆでガエル状態”にあり、気づかない内に想像以上に環境悪化が進み、既に手遅れとも言われ、次世代への問題の先送り現象が進み、近い将来、取り返しのつかない局面が発生する事につながっているのではないのでしょうか。

■流域圏や環境容量を活用した試みにより、日本の厳しい状況を知り、住む環境に余裕があるのか、緊迫した状況なのか、総体としての定量把握や、地域の特性や役割について理解が深まります。そして環境教育や地域情報の共有化や相互理解が進み、ライフスタイルや社会のあり方を探る事が可能になり、未来可能性の向上に繋がると想います。

■都市は単独では持続できず、大都市圏を支えてきた内外の地域や地方が持つ余力も低下しています。文化や自然の多様性を大切に、環境容量を向上させ、自立性の高い持続可能な地域社会や生活への移行が求められ、国土の環境性、資源性、防災性の向上への礎にもなります。

■住む環境や、流域において、ヒトと自然の関係を考える事が、スタートラインであり、都市と自然、都市と地方、また流域の上流と下流域の関係を再考し、私たち自身が、生活や文化を見直す時期にある事に、気づき事が、大切ではないでしょうか。

■明日の地球と、子どもたちの未来に寄与できる事を願ってやみません。

■気づかないうちに進む環境悪化！・・・ゆでガエル状態からの脱却！

- ★ 気づかないうちに進む、想像以上の環境悪化・・・すでに手遅れか???
- ★ ゆでガエル状態？ 次世代への問題の先送りにならない様に！
- ★ 昨今のエコブームには多くの課題や複雑性が混在



ゆでガエル脱却！！



【参考文献】

- 1) 大西文秀(2013):『流域圏からみた日本の環境容量』
-日本のバイオリージョン・全国09流域3D-GIS MAP-, 大阪公立大学共同出版会, 222pp.
- 2) 大西文秀(2011):『環境容量からみた日本の未来可能性』
-低炭素・低リスク社会への47都道府県3D-GIS MAP-, 大阪公立大学共同出版会, 183pp.